



音の連鎖

kou

壺の音

外では蝉の声が鳴り響き、店内では懐中時計の音がチクタクと時を刻んでいた。

今年で十八歳になる空海は、いずれは暇なこの時計屋『バビロン』を継がなければならない。

「なあ、オヤジ。そろそろ腕時計を商品として扱った方がいいんじゃない？」ガラス製の商品棚を拭きながら、空海は言い、「絶対」と付け加えた。

「お前は、金だ、利益だ、うるさい男だな。そんな細々としてると女ができねえぞ」
父は新作の懐中時計制作に没頭しながら、ルーペ越しに空海を見て言った。
「オヤジは、いつも時計か女の話しだな」と、空海は壁に掛かっている、懐中時計を眺め、「ふっ」と父が鼻で笑った。

「それでいいじゃねえか。あまり興味の対象がたくさんありぎると生き迷うぞ。それにな、時計は女と会うには必須アイテムだ。とくに懐中時計はな」
「意味がわからない」
「お前にもわかる時がくるさ。女の直感ってのは鋭いからな。どんな些細な変化も見逃さない。よく男を観察してるんだ。時計の針が一秒一秒刻むようにな。少なからず母さんはそういう人間だった」
父はどこか懐かしむように、首に下げられた懐中時計を見つめ、そして天井を見上げ、また新作の懐中時計制作に没頭した。

既に母は病気で他界し、ある意味男手ひとつで空海は育てられた。父から、「高校卒業と同時に店を頼む」という無理難題を軽快な口調で言われ、「任せてよ」と気軽に空海は言った。というのも、店を継ぐ、継がない、の会話をなぜか寝ているときに無理に起こされ、「そういうことだから」と最後は耳元で囁かれ、「どういうことだよ」と、もによもによと発した記憶が、彼にはある。

時計屋『バビロン』は創業してから祖父から数えて父で二代目になるが、高度経済成長の波に押され、懐中時計のニーズは年々減り、腕時計が街を席卷している。もちろん一部のマニアの間では懐中時計の人気は根強い。

「なあ、オヤジ。その懐中時計まだ出来ないの？」
「お前は、横からごちゃごちゃうるせえな」と父が怒気と唾を飛ばし、「人生において大事なことがわかるか？」と空海に訊いた。

「まだ十代の俺にわかるわけないだろ」
「じゃあ、今教えてやる」
「なんだよ？」
「準備だ」と父は断言し、「連鎖」と言い足した。
「なんだよそれ」
空海は苦笑した。
「小さい物事がいずれ誰かにとって大事なことになるんだ。それを俺は作ってる。繋げてやるんだよ」
「ますます意味がわからなくなったよ」
空海はさらに苦笑した。父はそんな彼の発言を無視し、「ほら、出来たぞ」と言い、「上出来だ」と満足気だ

った。

父から出来上がった懐中時計を空海は手渡され、蓋を開けた。秒針の音が独特だった。

式の音

闇に包まれ錆びれた商店街の片隅でフォークデュオ『反抗』の瀬尾は今日も演奏していた。ギターケースを開き足元に置いたはいいが、誰もお金を入れてはくれない。時代が悪いのか、はたまた彼らの音楽性に問題があるのか、おそらく後者だろう。瀬尾のパートナーを努める三橋君が言うには、「大丈夫だよ。僕らは反抗してるから」と、どこを汲み取っても到底理解できぬ発言をし、瀬尾を困らせた。だから彼自身も、「反抗しようぜ」と力ない言葉で応酬するしかなかった。

「ねえ、三橋ちゃん。人が全くいないのに演奏して意味あるのかな？」

瀬尾はギターの弦を張り替えながら言った。

「瀬尾君。意味は後付けでいいんだよ」

と三橋君は、まるで糊付けでもするかのように穏やかな口調を披露する。

「そういうもん？」瀬尾は不安そうに訊く。

「そういうもんだよ。今は楽しもうよ。だって、みんなが昼間、一生懸命働いてるのに、僕らが夜に活動しないでどうするの」

三橋君はそれが当然のように言い切った。

瀬尾は大学まで出て、就職はしなかった。企業に就職してスーツを着るという自分が想像できなかった。ギター一本で生活したい、そういう思いが彼にはある。三橋君も同じ大学で一つ上の先輩だが常に飄々として根が楽天的であり瀬尾とは正反対である。

瀬尾は、消極的で、すぐに不安になる。それでも三橋君は、「不安になることはいいことだよ」と白い歯をのぞかせ、「だって、真剣に生きてる証拠じゃない。真剣に生きてると、悩みや、心配事が増えるに決まってるじゃん。それを押しのけて一%の喜びを探そうよ」と緩やかな名言を放った。それが瀬尾の琴線に触れたことは言うまでもない。

「ねえ、瀬尾君。今日は演奏をこの辺で終わりにして、ちょっと寄りたいところがあるんだ」軽快な口調で三橋君が言い、「一緒に来てよ」と柔和な笑みをのぞかせた。

「別にいいけど、どこに行くの？」

「あそこ」

三橋君が指差した先は、漆黒の闇にただ一つだけ仄かなオレンジ色の明かりを放つ店だった。

「前から気になってたんだ」

「なんの店？」

「わからない」と三橋君が首を横に数回振り、「だから行くんだ」と付けた足した。

「こんな真夜中に、この人気のない商店街で営業してる店ってあるんだね」と、瀬尾は明かりが灯ってる店を凝視し、「だから行くんだ」と三橋君が再度言った。

ギターをケースにしまい、それを担いで夜の商店街を瀬尾達は歩いた。商店街の周囲は非常に静かで、人が住んでるとは思えなかった。それがこの商店街の特徴であり、魅力でもあるが、人恋しい。

問題となってる、というか、三橋君が気になってるお店の前に来た。木造建築で古びた印象を抱いたが、修繕を繰り返したのか、しっかりとした店構えになっていた。

看板には、『バビロン』とゴシック体で印字されていた。

瀬尾は店の中を覗いた。すると、「瀬尾君、覗き見は犯罪だと思う。入ればいいんだよ」と三橋君に冷静に嗜められる。

三橋君が店の扉を開き、店内にはいる。そして瀬尾も続いた。

そこには、店内の壁に所狭しと懐中時計が立て掛けられ、ガラスのショーケースにも懐中時計が収められていた。辺りを三百六十度見回して瀬尾は気づいた。そう、懐中時計しかないことに。

「三橋ちゃん。懐中時計しかないね」と疑問をぶつけたが、「そういう店だからしかたがないと思う」とドライに三橋君に返された。

店員がいないな、と瀬尾が思った矢先に、濃紺のエプロンを着けた店主らしき人物が店の奥から現れた。歳は三十代であろう。若い頃は細身だったが、年齢と共に身だしなみに気をつかわなくなったタイプだ。髪はボサボサで、口元にケチャップらしき赤いソースが付いている。

「いらっしゃい。食事中でしてね」

聞いてもいないことを店主は発した。

「懐中時計専門店ですか？」三橋君が言う。

「そうですよ。僕が跡を継いだときは、腕時計も仕入れようと思ったんですが、めんどくさくなりましてね、懐中時計のみで賄っています」

店主が口元のケチャップに気づいたのか、舌でペロリと舐めた。そもそも、めんどくさい、の一言で店を営んでいるのだろうか、という疑問が徐々に苦笑を瀬尾にもたらした。

「値札が貼られてないんですが、だいたい、いくらぐらいなんですか？」

瀬尾が訊いた。

「安いですよ。三万から百万ぐらいですね」と店主がニヤニヤしながら言い、「価格に開きがありますね」と三橋君がつぶやいた。が、店主はそれに対しては何も言わなかった。

「千円から一万円代のもはありますか？」

三橋君が店内に響く秒針のリズムを足で刻みながら店主に尋ねた。

「ああ、安いのね。それだと……」店主は腕を組み考え、悩ましげな表情をし、「ちょっと待ってて」と店の奥へ引っ込んだ。

「買うの？」

瀬尾は三橋君の横顔を見て訊き、

「いいのがあれば」

と相変わらずの淡々とした受け答えだった。

二分ぐらいして、木箱を持った店主が姿を現した。

「これなんかどうだろ。三千元でいいよ」と、あたかも値段を今決めたような口調で言い、木箱を開けた。

木箱の中には青、黄、赤、と三色の小ぶりな懐中時計が均一な距離間隔を保ちながら、入れられていた。

瀬尾は、目を見開いた。三千元とは思えないぐらい、スタイリッシュかつ若者が持っても違和感がないデザインだったからだ。三橋君もそう思ったのか、執拗な前傾姿勢をとり、今からハードルを飛ぶかのようだった。

「これが三千元ですか？」

三橋君の声が弾む。

「そうですね。しかし問題が？」

「問題？」

瀬尾が店主を見た。

「ええ」と店主は少し困った表情をし、「秒針の音が……」と言葉を濁し、手に持っていた木箱をガラスケースの上に置き、青色の懐中時計を一本手に取った。

店主が懐中時計の外蓋を開け、中身を見せる。秒針がチッチッチと刻む。

その時だった。

フーン、と鳴り、また数十秒経って、今度は、ジーン、と秒針の音が鳴った。

「これはどういうことですか？」

すかさず三橋君が疑問を口にする。

「欠陥品ではないんだけど、お客さんからは不評だよ」と店主が答えになってない答えを提示し、瀬尾は当然だろうと、思った。蓋を開ける度に、異音が混じられても困る。そう、瀬尾は感じた。そして店主がさらに続けた。

「オヤジが最後に制作したのが、この懐中時計でしてね。三、六、九の部分に秒針が来ると異音が鳴るように設計したんですよ」

「なんのためにですか？」

三橋君がさらに詰め寄る。

「それがよくわからないんですよ。オヤジが昔言っていたのは、これを面白がって買ったやつが、どこかで繋がるだろう。とか意味不明なことを言ってましてね。時計ってそういうもんだ。と最後に付け加えてたんだけど」店主は、最後に、そんなことあるのかな、とぼそそと言った。

「えっ！ちなみにそれを買った人はいるんですか？」瀬尾は店主が持っている懐中時計を指差した。

「いません」店主は即答した。

「素早い解答ですね」と三橋君は苦笑し、「じゃあ、それ買います」と力強く言った。

その言葉に店主は目を見開き、驚愕の表情をし、瀬尾も三橋君と店主の顔を交互にスライドした。

「三橋ちゃん、本気？」瀬尾が訊く。

「君、いいの？」店主までも不審がる。

「ああ、本気だし、いいですよ」と三橋君は言い、木箱に手を入れ、黄色の懐中時計を掴んだ。そしてポケットからくしゃくしゃになった夏目漱石を三枚取出し、店主に手渡した。

「お買い上げありがとうございます」と店主はこれ以上ない声を張り上げ、チラッと瀬尾の方を見て、君もどうだい、という嫌らしい目線に促され、赤色の懐中時計を視線のみで買わされた。新しい営業手法だと、瀬尾は思わざるを得なかった。

最後に店主が、「君たち何をしてる人？」とギターケースを見ながら素朴でありきたりな質問をし、「ミュージシャンですよ」と三橋君が懐中時計を首にぶら下げながら抑揚のない声で言い切った。

「へえ、そうなのか。じゃあ、その懐中時計がお守りになるといいな」と、やさしげな声で言った。

参の音

「相変わらず真面目じゃのお」と近所に住む老人に声を掛けられたはいいが、毎回会う度に最初の言葉がそれであり、いかんせんそこまで仲良くはない。真面目？その一言が、龍一の全てを物語っている。二十三年という人生を歩みながら、女性と付き合ったことがない。ある日、会社の上司にそれとなく相談してみたら、「今は、そういう時代だから」と時代のせいとされ、納得してしまう純粋さを彼は見せた。

龍一は老人に手を振り、車に乗り込んだ。新卒で入社し、初めてのボーナスで中古のオデッセイを購入した。色は黒。新品で買えばよかったが、ボーナスを少し貯金に回したいという安定志向である自分の性格が露呈された瞬間だった。この偏執的なまでの経済観念が女性を遠ざけている一要因なのではないかと、彼は考える。

ケチ、せこい、保守的。あらゆるマイナス要素が、龍一の脳裏を過った。

イグニッションキーを回し、エンジンが掛かると同時に車内に音楽が響き渡った。今が時代は最新のHDデッキで録りだめができるが、龍一の車は中古であり、未だにCDデッキである。それでも満足だ。手軽さや簡便さでネット経由で音楽をダウンロードするよりも、CDという円盤状に詰められているアーティストの、`想い、`というのを感じたいと、龍一は思う。その想いが伝わるのが今聴いてる、フォークデュオ『反抗』の名曲である『反抗3・6・9』である。今から十五年前の曲であるが、全く持って色褪せない。だからといって、彼らの売れた曲はそれだけでありリリースした曲もその一曲だけである。その後は他のアーティストがそうであるように泡のように市場から消えていった。

時代が移り変わり『反抗3・6・9』という曲は、ネット上の書き込みで、ある憶測が流れている。それは曲が始まってちょうど三十秒、楽器の音ではない、ジーン、という異音が鳴る。この曲の特徴は三分間の演奏で終わるのだが、その後、時計のチクタクの音と共にブーン、や、ジリーン、となぜか十五秒間隔で謎めいた音が演奏終わりに無音の中一分の間、耳に響く。当時のレコード会社（今は経営難で倒産）に問い合わせたところ、『本人達しか知らない事実なのでお答えできかねます』と丁寧な対応を示し、当のフォークデュオ『反抗』はその後、忽然と消えた。メディアにも一切でない。海外に逃亡したのでは？と犯罪者のような扱いに、龍一は書き込みを見て苦笑した記憶がある。

人は謎に惹き付けられ、龍一は『反抗3・6・9』に惹き付けられる。まず心の底から搾り出した嘆きの声、そして誰かに語りかけるようなサビ、歯切れのよいギターカッティング。それらがシンプルに構成されていて聴いているものを魅了をする。

目の前の信号が赤になり、龍一はブレーキを強めに踏んだ。停止線が車内から見える位置に止めるのが、彼の美学である。

曲がサビに差し掛かる。

`ねえ、僕をみてる。見続けてる？そんなに哀しい顔しないでよ。僕は見てるから、`

この意味深なサビの歌詞が、龍一の心を深く抉った。自分のことを言われてような気がしたからだ。

人は誰かに必要とされたいと思う生き物だ。存在異議をそこに見出す。どんなに誰かといえども、どんなに仕事をこなそうと、`必要、`と実感できなければ、心に空虚が伴う。

それは恋愛にもいえることだろう。ならば龍一は、これまで必要とされてこなかったのだろう。思わずバックミラーで自分の顔を確認した。そこには悲しげな表情をした自分がいた。それにしても赤信号が長い。本当はそこまで長くはないのかもしれないが、停止、している時間が龍一は嫌いだ。その証拠に曲が三分で終わり、問題の時計の秒針のような音と、十五秒間隔の異音を車内に響かせた。

もし『反抗』の二人が、意図的に異音をレコーディングしたとして何の意味があるのだろうか？むしろ何がしなかったのだろう。気づけばネット上の住民と同じ謎に惹き付けられている。考えても考えても、龍一はわからなかった。そういえば、ブーン、という音は幽霊の雄叫びだと、言っている説もあった。それはないだろう、と龍一が思った矢先、

「きゃあ」と女性の叫び声が聞こえ、龍一はシートベルトをしていたにもかかわらずビクッと身体が跳ねた。

「誰か、誰か、ひったくり、ひったくり、だれか助けて」と、女性の涙声が龍一の鼓膜を刺激した。

龍一は辺りを見回した。その声は左斜め後方からのものだった。白いワンピースを着た女性がしゃがみ込んでいるのが確認できた。犯人と思しき男が側道を走り抜ける。サングラスを掛け、暑い夏にはそぐわないニット帽、そして革ジャン。変装しているのだろうが、非常に目立つ。犯人が停車している龍一の車の横を走り抜け、チラッと彼を見た。そして龍一の後方からクラクションが鳴り響く。龍一は前方を見た。信号が青に変わった。

龍一は考えた。さてどうする？脳内に、『反抗3・6・9』のサビがこだまする。

「ねえ、僕をみてる。見続けてる？そんなに哀しい顔しないでよ。僕は見てるから、犯人は龍一を見た。そして龍一も犯人を見た。この曲の通りではないか、と彼は考える。龍一の決断は早かった。ひたたく犯を追う。

犯人と思しき男が交差点を左折したのを見計らい、龍一も車を発信させ左折した。すぐに路肩にハザードランプを点け、停車させた。車から降り、かつて陸上部で全国体会まで出場した脚力で犯人を猛追した。陸上を引退してから、それなりの年月が経つが、体がかつての記憶を覚えてるはずだと、龍一は自分を鼓舞した。

犯人とは距離にして二百メートルほど開いていた。龍一は、フツと鼻で笑う。二十秒ほどで追いつくだろう、と龍一は思った。

龍一は腕を前後に動かし、腿を高く上げ、走り抜けた。前方から人々が、「何事だ」、と目を見開き、通りすがった学生が龍一の走る姿を見て、「美しいフォームだなあ」と、憧れとも驚嘆ともとれる声音で言った。

それらの声を尻目に龍一はアスファルトの上を駆け抜けた。気づけば革靴は脱いでいた。靴下のみで走った。一体、何をやっているんだ、と自分に問いかける。

答えは簡単だ。ひたたくり犯を追っているのだ。

龍一の脚力もあり、犯人との距離が縮む。犯人が後ろを振り向いた。そして犯人がサングラスを投げ捨てた。かつてラストスパートをかける際に、その合図としてサングラスを投げ捨てるマラソンランナーがいたのを、龍一は思い出した。だからといってスパートをさせる気は、彼にはない。

犯人との距離が一メートルに近づき、龍一は何を思ったか、勢いに任せジャンプ一番、飛び蹴りを犯人に食らわせた。『うふお』と犯人がドンキーコングのような声を漏らし、そのまま、地面に倒れ込んだ。

龍一は、犯人をマウントして取り押さえ、「警察に通報お願いします」と叫んだ。

☆

「瀬尾君、そこはもっと心の底から声を出して欲しいんだ」と三橋君が冷静に言い、「頼むよ」と有無を言わせぬ口調が、瀬尾は恐かった。

というのも、懐中時計を買った翌日、三橋君の提案により路上で演奏するだけでは、駄目だろうということでオリジナルのデモテープを作ることになり、スタジオに通いつめている。三橋君曰く、「インスピレーションが湧いた」とのことだった。

「心の底と言われてもなあ」瀬尾は指先で顎をとんとん叩いた。

「鬱屈した思いや、純粋な思い、はたまた嘆きや、これだけは伝えたいと思うことを詞とは別のところで表現して欲しいんだ」

いつになく三橋君は饒舌になり、言葉に淀みがなかった。

と、言われてもやはり瀬尾は悩んだ。就職しないでミュージシャンになりたいという思いで、今を過ごしている。他の友人たちは就職して安定的な生活を過ごしている。「夢はあきらめろ」「現実を見ろ」と揶揄されることは少なくない。それでも誰かに見て欲しい、知って欲しい、認めて欲しい、このままで終わりたいくない。そんな思いが瀬尾を纏った。

今のこの悔しさや、嘆きや、もどかしさ、があれば、もしかしたら・・・・・・・・

「瀬尾君」と声を掛けられ、三橋君を見た。そして、「目つきが変わったね。ベストイクになりそうだ」と久々に垣間見せる笑顔を三橋君が零し、瀬尾は腹を括った。

曲名は、『反抗3・6・9』ということにした。この曲の特徴は何と言っても、異音を放つ懐中時計である。三橋君が、「なぜだから知らないけど3の倍数に秒針がくると異音を発するんだ」と言い、「店主のお父さんも風変わりだね」とつぶやいた。

「でもさ、演奏が終わった後に一分間、懐中時計の音ともつかないのを録音して大丈夫かな？聴く人が不思議がるような気がするんだけど」

瀬尾は言った。

「大丈夫だよ。人は謎に惹き付けられるから。この懐中時計を見て、秒針の異音を聴いた時に思ったんだ。店主が懐中時計は売れてない、って言ってたでしょ」三橋君が瀬尾に確認し、「うん」と頷いた。

「たぶん。店主のお父さんは懐中時計の素晴らしさに、気づいて欲しい、という思いを込めたんじゃないかな。だから僕らが持ってるような懐中時計を作ったんだよ。異音を放てば確実に気づくからね」三橋君はハニカんだ。さらに続ける、

「僕らも同じじゃないか」

「同じ？」瀬尾は思わず身を乗り出して訊いた。

「うん。気づいて欲しいんじゃない。僕らの音楽に」

「たしかにそうだね。でも、プロデビューできるかな」

「この一曲に全てを込めたんだ。その思いが伝わらないなら、僕らは音楽を通して何かを伝える職業に向いてな

いのかもしれない。それでも信じよう」

「思いが届くといいな」

瀬尾は言い、三橋君は、首に下げられた懐中時計をさすりながら、「そうだね」とやさしい声で言った。

思いの音

「りゅう」と明美が龍一を呼んだ。「どうした」と急いで彼女に駆け寄った。結婚して三年になり、明美のお腹には新しい命が宿っている。

「私のお腹を蹴ったのよ」と明美が興奮してお腹を擦りながら言い、「そんなに興奮するなよ」龍一がたしなめる。

「男って、こういうときになるとすぐあたふたするのね」

明美がニヤニヤしながら龍一の顔に触れた。

「ごめん」と龍一は、いつもの気弱さを見せ、「大丈夫よ。りゅうには勇気があるって知ってるから」

そう言い、明美は龍一の頬にキスをした。

勇気、か。龍一は明美との出会いを思い出す。四年前、ひたたくり犯を捕まえた。その、被害にあったのが明美だったのだ。

ひたたくり犯を捕まえたはいいが、その後は警察からの必要以上の事情聴取に辟易させられた。新人警官であろう、あどけなさの残る顔立ちの男に、「まさか、飛び蹴りで犯人を捕まえるとは思ってもみなかったです。見習います」と憧れの眼差しを向けられ、握手までさせられた。その手は妙に温かく、手汗でべとついていた。不快で印象深い体験だったと、龍一は思う。

その後、龍一と明美は最寄りの交番まで行き、再度、事情聴取が行われ、その時に明美の年齢が二十二歳ということを知った。パン屋さんの店員だった。結局解放されたのは四時間後だった。長すぎる。

空には齧りつきたくなるようなまん丸い月が照らしていた。明美から、「本当にありがとうございます。助かりました」と今では考えられないが丁寧にお辞儀をされ、「いやいや、とんでもないです」と、おどおどして返答した。

明美から後日お礼をしたいと言われ、そんなのいいですよ、と照れながらも、内心は明美の容姿が龍一のタイプだったので数秒後には承諾していた。整った顔立ち、栗毛色のショートカット、薄めの化粧は白のワンピースを一層際立たせていた。

それから三日後に明美から連絡があり、彼女の家へ招待された。というのも、彼女は当時アルバイトで一人暮らしの生計を立てていて、外出する余裕がないとのことだった。なのでお礼として手料理をふるまってもらった。食事を外食で済ます龍一にとって、それは至福のときであり、女性の部屋に上がるのは初めてのことだった。部屋は芳香剤の匂いが行き届いていて、カーテンや家具などは清潔感のある色で統一されていた。

「古い音楽が好きなんですか？」

龍一は訊いた。コンポが置いてある横に、ビートルズやローリングストーンズのCDが積み重なっていた。

「ああ、あれ」コンポの方に明美は目を向け、再び龍一の方を見て、「好きですね」と笑顔で答えた。

「女性で珍しいですよ」

「よく言われるんですよ。でも、シンプルさの中に深みがある曲って今の時代少ない気がします」と音楽評論家のような口調で明美がさらっと言った。

そこからはお互い、沈黙が続き、気まずいムードが漂い、龍一の女性と接する少なさが露呈された。サラダに添えられているレタスのパリ、カリ、という歯ごたえが部屋に響いた。

「音楽好きなんですか？」長い沈黙を破り、明美が訊いた。

「好きですよ。ビートルズも好きですし、昔から毎日聴いてるのが、『反抗』ですね」

「えっ」と明美が驚き、「あれですよ。曲が終わった後、一分間だけ時計とも時計ともつかない秒針の音が鳴る？」

明美が箸を止めた。

「それです。それです」

龍一は、笑顔で二回連呼した。共通点があり、嬉しくなったのだ。

「私、ひたたくりに会った日、その曲を聴いて歩いてたんですよ」

過ぎ去った日を忘れるように明るい口調で明美がいった。

「えっ」今度は龍一が驚きの声を上げ、「実は僕も、ひたたくり犯を追う前に、『反抗3・6・9』を聴いていたんです。妙に信号が長かったのを覚えています」

「そうなんですか」明美が目を見開き、「凄い偶然ですね」とプチトマトをつまんだ。

彼女の話によれば、『反抗3・6・9』の曲のラスト一分間は何の音なんだろう、というのを考えていて、自分の世界に入り込んでいたとのことだ。その隙をひたたくり犯に狙われたらしい。奇妙な偶然というか、必然？ そんな言葉が龍一の脳内にテロップとして流れた。

それを機に、龍一は自分でも驚くほどの猛アタックを仕掛け、その一ヶ月後に付き合うことになり、交際一年を経て結婚までこぎつけた。周囲からは、「お前にはもったいない」だとか、「もう少し男なら遊べ」という、野次や嫉妬ともとれる愛情溢れる言葉を頂き、現在に至った。

明美が、外の空気を吸いたいということで、近所の商店街を歩いた。数年前までは閑散としていた通りも、近くに大学が出来たことで活気を取り戻しつつあった。若者が増え、飲食店が所狭しに乱立し、錆びれたシャッターもペンキが新しく塗られ、街にも人にも柔らかい笑顔がちらほら見受けられた。

「こっちに引っ越してきてよかったね」

明美が屈託のない笑みを龍一に向ける。

「そうだね。生まれて来る子供にも、良い刺激になりそうだし」

龍一も負けじと明美に笑顔を返す。

「そういえば、りゅうが仕事に行ってるときにさ、久々に『反抗』の曲を聴いてみたのよ」

「あの思い出の」龍一が茶化す。

「そう、思い出の」明美は龍一の茶化しを流した。

「やっぱり、あの最後の一分間って時計の秒針だよね？」

明美が訊いた。

「とは思うんだけど。秒針の音ってチッチッチって一定じゃん。あれは所々異音が」

「そうなんだけど。それも彼らの意図したことだったら？」

「意図？」

僕は首を傾げた。

「うん。時間って有限じゃない？無限にあるわけでもないし、かといって私達は時間という存在の有り難みにも気づかないじゃない」

明美が哲学者ソクラテスのような持論を展開した。

彼女が言ってることはわからなくもない。誰もが時間を大切さを認識するが、日々の出来事に忙殺され、気づけば歳をとり、忘れ去る。そして、気づく。あの時、こうしておけば、と。

「でも、それは考え過ぎだと思う」

龍一は言った。

「そうかな。『反抗』の曲ってあれだけでしょ」と明美は龍一に同意を求め、「うん」とうなずいた。

「なら、それなりの覚悟を持って臨んだと思うよ。りゅうだって、覚悟を決めたから、ひたたくり犯を追って、それで今があるわけだし」

なるほど。たしかに『反抗3・6・9』がキューピット的な存在になったことは明白だ。この曲にはそういう力があるのだろうか。繋がりが気づき、何かが作用しているのか、龍一にはわからなかった。それでも、今があるのは間違いなく事実だ。なら、そういう力があるのかもしれない。見えない糸が。

カフェで休憩をとろうと思ったとき、「ねえ、あれ」と明美が指をさした。龍一はその方向を見た。そこには三人の中年男性がいた。その中の一人は老人と言っても過言ではなかった。

「あの人達がどうかしたの？」

龍一が訊いた。

「年齢の割には、カラフルなものを首にぶら下げてるな、と思って」明美がお腹を擦りながら言った。

たしかによくみると、青、黄、赤、の丸いものを男性三人は首にぶら下げていた。彼らは店の前で時折笑顔を覗かせ楽しそうに会話をしていた。その店の店名が『バビロン』というのが、龍一に確認できた。

「信号機みたいだね」と明美が言い、「休憩終わったら、あそこの店に行ってみようか」と龍一が言った。

「なんの店なんだろう、楽しみだな」と明美がスキップしそうになったので、「もう少し身体を大事に」と龍一がたしなめた。

これだから男って、といつも明美の膨れっ面を横目に、この幸せな気持ちを生まれて来る子供にも分け与えていこう、と龍一は思った。